

ぎ れい しょう ぞく 儀 礼 の 装 束

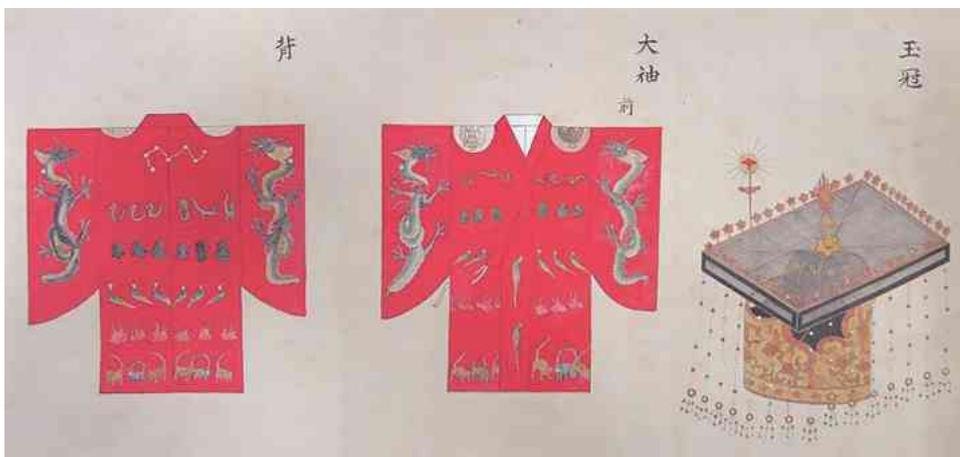
- 主 催 福井市立郷土歴史博物館
- 会 場 松平家史料展示室
- 会 期 令和元年5月23日(木)～7月10日(水)
- 休館日 6月17日(月)～19日(水)、7月1日(月)

新天皇が即位され、「令和」という新しい時代を迎えました。古くから日本では、さまざまな儀礼に際して、特別な衣装を身に付けてきました。本展では、越前松平家に伝えられた絵画資料や装束の中から、江戸時代から明治期に、朝廷や幕府において用いられた儀礼の装束をご紹介します。

べん 冕服 一天皇の礼服一

冕服とは、奈良時代から江戸時代まで用いられた天皇の礼服です。冕冠（下図「玉冠」）と袞衣（下図「大袖」）からなる唐風の装束です。

礼服は、唐制度の導入の一環として、朝服・制服とともに取り入れられました。天皇の礼服である冕服は、聖武天皇の天平4年（732）の正月の朝賀から、1100年以上にわたって用いられてきましたが、孝明天皇の弘化4年（1847）の即位の儀を最後に、唐様であるという理由から廃止されました。明治天皇の即位の儀以降は、黄櫨染（染色の名）の御袍の束帯が用いられています。（※束帯、袍については、次項を参照）



「主上御礼服秘図」(部分) 越葵文庫 (当館保管)

越前松平家に伝えられた「主上御礼服秘図」には、江戸時代の天皇の即位の際の衣服や調度、式次第の様子が描かれています。“秘図”とあるように、前近代までは、天皇の姿は公の眼に触れるものではなく、このような画卷も、限られた有職家の間などで秘蔵されてきたものです。

束帯

束帯は、袍、袴、冠、履、装身具などの装束一式を身につけた姿の総称で、特に腰を“石帯で束ねる”ことからの名称です。

朝廷において、有位の官人（男性）が着用するよう規定された衣服（朝服）でしたが、時代がくると、幕府の制度においても、將軍宣下や歴代將軍の大法会の参拝の際などに、大名や五位以上の役人が着用しました。

袍は、朝廷から授けられる位階によって、着



黒袍 越葵文庫 (当館保管)

用できる色（位色）が定められていました。これを位袍といいます。天皇の位袍は、黄櫨染（ハゼノキと蘇芳で染色される黄褐色）の御袍です。諸臣の位袍は、時代によって変化がありますが、四位以上が黒袍で、越前松平家もこれを用いました。

かりぎぬ 狩衣

狩衣は、公家の略装として、また武家においては正装として用いられた衣服です。もとは“狩猟に用いる衣服”の意で、幅広い層に用いられました。動作がしやすいように、肩の袖つけ部分が僅かで、前身頃と袖は明け開いたままに仕立てられています。また袖口には、広い袖を絞り上げられるように括り緒が付いています。

狩衣は、服制から自由であったため、さまざまな趣向で着用されました。江戸幕府では、従四位下の大名が年始登城や將軍歴代の廟所参拝の礼服として用いました。

越前松平家には、孝明天皇と明治天皇から松平春嶽に下賜された狩衣が伝えられています。

けいこ 桂袴

桂と袴からなる女性の装束です。桂と袴は、もとは公家の女性が常用とした衣服でしたが、特に「けいこ」と音読する場合は、明治新政府によって定められた婦人の宮廷服のことを指します。

桂袴は、明治維新後、宮中の女官や拝謁・参列の高官夫人の服装として服制が定められ、洋服とともに併用されました。越前松平家では、桂袴の服制で、第一号（宮中席次第三階以上）にあたる礼服と通常服が一揃い、調えられています。



天賜御狩衣 春嶽公記念文庫



桂（単付） 越葵文庫（当館保管）

※主要参考文献

武田佐知子・津田大輔著『礼服 天皇即位儀礼や元旦の儀の花の装い』大阪大学出版会、2016年発行

鈴木敬三編著『有職故実大辞典』吉川弘文館、1995年発行

関根正直著『服制の研究』古今書院、1925年発行

松平春嶽著『幕儀参考』（『松平春嶽全集 第一巻』原書房、1973年4月発行、所収）

【関連イベント】

（担当学芸員による展示解説）

ギャラリートーク

5月26日（日）、6月8日（土）、
6月30日（日）午後2時より40分程度

次回の展示

夏季特別陳列①「東京オリンピック1964」

令和元年7月13日（土）～8月25日（日）

夏季特別陳列②「ありがとう平成—博物館コレクションからみる明治から平成—」

令和元年7月20日（土）～8月25日（日）

松平家史料展示室 展示解説シート No.122
令和元年5月23日発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1
電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489
担当 佐々木佳美

印刷 宮本印刷